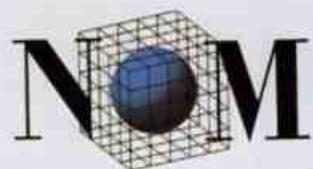


新潟県立近代美術館便り

雪 椿 通 信



第19号

2002.9

小山正太郎と「書ハ美術ナラス」の時代

10月4日(金)～11月17日(日)

「美術」という言葉が、明治5年に初めて公にされた翻訳語であることを御存じでしょうか。「美術」も明治維新後、西欧各国に劣らない近代国家建設に邁進する新政府の文明開化政策の一翼を担ったものだったのです。

こうした開化期に長岡出身の小山正太郎は、油画（洋画）で立身し、国造りを図ろうとします。小山はすぐに油画の頭角を表しますが、明治15年、24、5歳の時「書ハ美術ナラス（書は美術ではない）」という論を発表し、その理由を列挙し世に問います。これは、生まれたばかりの「美術」を論じた嚆矢であり、また、「書」だけではなく、「美術」とは何かが問われた事件でもありました。

これに対し20歳の若き文部官員の岡倉覚三（天心）は小山論の不完全さを例を挙げて指摘しました。ですがこの論争はそれで終わり、岡倉に軍配が上げられるのですが、岡倉は「書は美術だ」とも言っておらず、曖昧のまま終わっています。それから120年、明快な結論を得ないまま今日に至っています。

ところで当事者の書家達はこの時、従来の東洋的書画観、文人的世界にとどまり、この論争に全く与みませ

ませんでした。それは、「書」が君子の芸であり、作り物、こしらえ物ではないという考え方が支配的だったためです。ですが西欧的論拠の前に「書」は、危うい立場になっていました。しかし明治13年、清人楊守敬の来日により、古い時代の古朴で力強い書が伝えられ、日下部鳴鶴ら一部の書家たちは、開眼せられ、新しい時代の書が息吹き始めていたことも事実でした。

一方、絵画においては欧化主義の開化期には洋画が積極的に学ばれていましたが、明治15年、フェノロサによる洋画を排斥し、絵画の文学性を排除した演説『美術真説』によって、一気に国粹主義が台頭します。それにより小山ら油画家たちは冬の時代を迎え、また幕末以来盛んであった文人画を中心とした伝統絵画は退潮を辿ります。この時から新日本画の創出がフェノロサや岡倉によって図られ、後にその牙城として東京美術学校が創立されるのです。

こうした明治10年代の「美術」と「書」との大河ドラマを、第一部では小山を中心とした油画、そして第二部ではフェノロサ、岡倉によって否定された伝統画、また彼らが理想とする新日本画によって構成します。加えて

福島県立美術館コレクション展

2003年2月15日(土)～3月23日(日)

新潟県では、隣接県との文化交流の一環として、平成11年度に群馬県立近代美術館と当館で所蔵品を交換する展覧会を開催しましたが、本年度は福島県と交流し、同県の県立美術館との間で所蔵品交換展を同時開催することになりました。

福島県立美術館は、1984年に開館して以来、収蔵作品は1500点を超え、福島県に関連する作品や国内外の優れた近現代美術の作品を収集していることで知られています。まず福島県の美術では、幕末に活躍した洋風画家の亜欧堂田善を始め、大正期の夭折の洋画家関根正二、独自の近代文人画の世界を展開した酒井三良、木版画の分野で内外に知られる斎藤清といった同県出身作家を軸とした収集がなされています。また、日本画の下村観山、連水御舟、安田靉彦、今村紫紅ら、洋画では岸田劉生、村山槐多、安井曾太郎、松本竣介などの大正・昭和初期の画家たち、戦後の北川民次、山口長男など様々な系譜を見渡し得る収集を続けています。海外の美術においては、20世紀のアメリカ写実主義絵画の巨匠アンドリュー・ワイエスと社会派リアリストのベン・シャーンを中心に、アメリカン・リアリズムの系譜に連なる作家たち

の系統的なコレクションを形成しています。

本展覧会は、このような特色を持つ同館の収蔵作品から代表作約100点を選んで構成する予定です。では、その中からとりわけ注目して欲しい二人の作家を取り上げます。

先述のように、現代のアメリカン・リアリズムの代表的な画家であるアンドリュー・ワイエスは、その克明な細部描写に見られる卓越した技術と、孤独感や憂いを含む画面によって多くの人々を魅了しています。彼は、故郷のペンシルヴェニア州チャズ・フォードと、夏を過ごすメイン州クッシングというほとんど二つの地域のみを題材に描いてきましたが、この展覧会に出品される作品を通して、身近な風景や人物を深く見詰め続けるワイエスの「眼」というものを強く感じ取ることができるでしょう。

また、大正期に活躍した洋画家の関根正二は、ほとんど独学で絵を学び、わずか20歳と2ヶ月でこの世を去りました。その短い生涯に残した作品は、現在所在が確認されているもので100点ほどに過ぎず、その大半はデッサンとなっています。今回、そうした関根の限られた作



《南浦渡舟（⑤日下部蘭麴部分）（⑥巖谷一六部分）》明治14年 個人蔵

第三部では同時代の書と新しく胚胎した鳴鶴らの六朝書道を展示し、美術による国造りを夢見た、近代の熱き夜明けの時代を御覧いただきます。
 (主任学芸員 松矢国憲)



小山正太郎《秋景図》明治20年 個人蔵



野野芳彦《仁王延鬼図》明治19年 個人蔵

品にいくつも出会えることは大きな喜びだといえます。加えて、安井曾太郎、村山槐多、上野山清資など彼の周辺の作家たちの作品も併せて見られるのも魅力です。

このように、福島県立美術館の優れた所蔵品を一堂に会する展覧会として、多くの方々に御覧いただきたいと思ひます。
 (美術学芸員 澤田佳三)



アンドリュー・ワイエス
 《そよ風》1978年



関根 正二《神の折り》1918年頃

所蔵品による ひく楽しみ・かく遊び ～素描の魅力～

11月23日(土)～12月23日(月) <企画展示室>

作品の下絵や草稿、あるいは写生やデッサンなど、画家の手の先から生み出される「線」は、ときに完成作以上に豊かな内容を私たちに語りかけてくれます。作者の感情や呼吸といったものが、そこからじかに伝わってくるからではないでしょうか。今日では、作品制作の前段階としてだけでなく、こうした素描独自の芸術性も認識されるようになってきました。

当館でも素描類を数多く収集してきましたが、まとめて展示する機会は残念ながらそれほど多くはありません。そこで、今回は素描を中心に「線的な方法で表現された作品」に的を絞って所蔵品のなかから選択し、企画展示室で御覧いただくことにしました。

出品を予定している作品は小林古徑や土田麦徳、岩田

正巳などの日本画家の下絵や、安井曾太郎、牧野虎雄、田畑あきら子、末松正樹など洋画家のデッサンやスケッチなど。時代やジャンルを超えて幅広く「線」の魅力を感じることでできるよう、他の作品にも目を向けます。今までありそうでなかったチャンス、くれぐれもお見逃しのないように！

(美術学芸員 小西珠緒)



土田麦徳 芥子素描
1926年(大正15) 44.6×30.2cm

ワークショップ、好評です！

新潟県立近代美術館では、今年度から、新たな二つのワークショップをスタートさせました。作ることを中心とした〈びじゅつ☆体験隊〉と美術館そのものをまるごと楽しもうとする〈歩いて発見!びじゅつかん〉です。自ら体験することと、気軽に楽しむことに重点を置いています。

ゴールデンウィークに行われた〈びじゅつ☆体験隊〉「つなげて、組み立てて あそぼう」では、場所と材料が足りなくなるほどの大盛況。参加者のほとんどが夢中で創作し、充実した表情で帰っていきました。

人気の理由のひとつは、指導も評価もしない自由さでしょう。何を作ろうとも、自分の気持ちさえ満足すればいいのです。そして、もうひとつは、美術館という開かれた場で行なっていることです。自宅よりも広く安心して作業できる場に、様々な感性を持った様々な年齢層の人が集まって思い思いに創作。親子・家族・友人同士などの共同作業によって親密感と発想の広がりがある一方

で、たまたま隣にいた知らない人の感性に刺激を受けたり会話が生まれたり…。思いがけない創造の場が広がることに、担当者もびっくりです。

この創造の場と、美術館での鑑賞をどう結びつけていくかが、今後の課題でしょう。

(主任学芸員 宮下 東子)



ワークショップ風景

魅力的な材料を手にして、さて、親子でなにを作ろうか…。

データベース室 新装オープン!!

当館のミュージアムショップの隣にあるデータベース室が今年の6月に新しく生まれ変わりました。データベースとは、当館の収蔵作品について調べることができるもので、展示スペースの関係で展示されていない作品についても、作品の画像を見ながら、作家略歴・作品解説・作品の素材・技法などについて詳細な情報を得られるというものです。平成5年、当館の開館当初からデータベース室は設置されていましたが、このたびのリニューアルにより検索スピードが大幅にアップされ、より使いやすいものとなりました。

具体的に操作方法等を御紹介いたします。今までの操作方はペンタブレット方式と言われるものでしたが、今回のリニューアルではこの方式から、パソコンのマウス方式に切り替えています。これもパソコンの普及率が高まっている現状に合わせたものです。作品検索の方法も簡単で、作家名から検索する方法のほか、ジャンル、

描かれている内容からも検索することが可能であり、お客様の興味・関心をもとに調べることができるようになっています。調べた情報についてはすぐその場でプリントアウトし、無料でお持ち帰りいただけます。当館の収蔵作品の内、約1700点について検索が可能ですので、御来館の際は是非御利用ください。



今まで1台だった装置を2台に!
1台につき2人ずつ座れるベンチシートで、最大4人までご覧いただけます。

新しい美術館の名称が決定しました

新潟県の新美術館開設準備室では、新潟市に新しくできる県立美術館の名称を全国から募集した結果、5月からの1ヵ月のあいだに2,809件もの応募がありました。たくさんのご応募ありがとうございました。中にはたいへんユニークな名称案もありましたが、選考委員による検討の結果、数多くの候補の中から「**新潟県立万代島美術館**」が選ばれました。

新潟市万代島の複合施設「朱鷺メッセ」の建設現場では、美術館のフロアも着々と完成に近づいています。準備室では、内装や床のフローリング、照明ライトや展示ケースなど細部にいたるまで、新しい美術館のコンセプトにふさわしいものとなるよう、何度も検討を重ねてきました。

また、美術館のグランド・オープンは平成15年7月12日(土)に決定しました。それぞれの企画展の詳しい内容についてはまた改めてお伝えしていきますが、そのほかにも所蔵品展を3回程度開催する予定です。最初の所蔵品展は、複合施設「朱鷺メッセ」内の新潟コンベンションセンターの開館にあわせたプレ・オープン展として、5月1日～5日の5日間開催する予定です。

現在、準備室では美術館の開館と展覧会のための準備をおこなっており、みなさまに親しんでいただける美術館を目指しています。新潟県立万代島美術館のオープンに、どうぞご期待ください。



万代島美術館 建設現場(外観)



万代島美術館 建設現場(展示室)

※いずれも平成14年7月現在の状況です。

新潟県立万代島美術館 平成15年度企画展スケジュール

- ・開館記念展Ⅰ「絵画の現在－日本の作家は何を描いたか」
(平成15年7月12日～8月17日)
 - ・「コレクター駒形十吉の眼」(平成15年8月23日～9月28日)
 - ・開館記念展Ⅱ「市民の時代－フランス・ハルスとオランダ・ハールレムの画家たち」(平成15年10月7日～11月24日)
 - ・「色彩と形のアラバスクーアメリカ現代陶芸の系譜 1950-1990」(平成15年12月2日～平成16年1月18日)
 - ・「明日への夢を乗せて－新潟の作家100人」
(平成16年1月24日～2月22日)
- (展覧会名は仮称です。また、会期は変更されることがあります。)

【お問い合わせ】

新潟県教育庁文化行政課 新美術館開設準備室
電話：025-285-5511 (内線3919, 3920, 3921)

表紙作品解説

モーリス・ドニ

《ベンガル虎、バッカス祭》

1920年 左：240.4×258.5cm
右：232.5×153cm

2度の巡り合い。ドニと日本の関係は、その一言に集約されます。日本の美術に影響され、大正期には逆輸入されることになった「ナビ派時代(1890年代)」が最初の山。そして留学した画家たちがドニと実際に顔を合わせた1920年頃が2回目になります。それは「理想から現実へ」の転換であり、一種の悲喜劇でもありました。たとえば、土田麦権が1921年の末に2度、ドゥルエ画廊の「モー

リス・ドニの個人展覧会」に立ち寄った時、どのような印象を持ったのでしょうか。美術史、特に日本の近代美術における「時差」の問題を考えさせられます。スイスの毛皮店「ベンガル虎」からの依頼で制作されたこの作品は、私たちにとっては特に興味深いものです。なぜなら、早々に日本人の所有となって海を渡り、1922年に「最も新しく将来されたもの」として「泰西名画展」に紹介されて以来、長く愛されてきた作品(現ブリヂストン美術館所蔵)の本画にあたるものだからです。毛皮店から撤去された後、残念ながら1980年代には分割され、別々に市場に出されました。二つの断片は、ここ日本で新たな巡り合いを果たしたのです。

(主任学芸員 佐々木奈美子)

利用案内

- 開館時間／午前9時～午後5時
- 休館日／毎週月曜日
- ※ただし月曜が祝日の場合は開館し、翌日休館(9/17(火)は開館 および9/24(火)～9/27(金)、12/24(火)～1/3(金)、3/27(木)～3/31(月)の各期間休館。
- 観覧料金
- ・企画展観覧料
企画展によって観覧料が異なります。
なお、同観覧料で、展示室1・2・3もご覧いただけます。
- ・展示室1・2・3観覧料
一般……410円(330円)
中学生(高校生・高校生)……200円(160円)
小学・中学・中等教育(前期)……100円(80円)
※()内は20名以上の団体料金です。

THE NIGATA PREFECTURAL MUSEUM OF MODERN ART
新潟県立近代美術館
〒940-2083 新潟県長岡市宮岡町字原掛278-14
TEL.0258-28-4111(代) FAX.0258-28-4115
http://www.taienet.gr.jp/kinbi/index.html
e-mail kinbi@coral.ocn.ne.jp
2002.9.1発行 4,000部

美術雑筆

「仏像の顔」そのⅡ

新潟県立近代美術館長 水野 敬三郎

前回、仏像の顔は長い間仏像の顔で、なかなか日本人の顔にならなかったことを述べました。実際、日本で仏像が造られ始めてしばらくの間、飛鳥時代7世紀のころは、製作地が日本か朝鮮半島か、あるいは中国か、区別がつかない仏像が間々あります。しかし、やがて日本の仏像の顔が他の国の仏像の顔と見分けられるようになったことも事実です。そして、その顔だけは時代によって、もっと細かく年代によっても、変化していきます。

例を平安時代前期、9世紀にとります。大阪の河内長野にある観心寺の如意輪観音像は、この期の真言密教彫刻の代表的作品として有名です。嵯峨院太皇太后橘嘉智子が発願し造立したものと思われ、観心寺で鐘の铸造を計画した記録のある承和7年(840)ころに完成したと推定されます。長く秘仏として伝えられてきたため、当初の彩色が鮮やかに残る美しい像です。その顔立ちは豊満ですが、頬から顎へかけての肉どりが引きしまり、切れ長の目や小ぶりの鼻のつくりにも特徴があります。これとそっくりな顔立ちをした像に京都神護寺の五大虚空蔵菩薩像と京都太秦の広隆寺講堂の本尊阿彌陀如来像があります。前者は承和7年から12年までの間に造られた記録があり、後者はおそらく、承和7年に亡くなった淳和上皇の追善供養のために、その女御であった永原御息所が造立したものです。これらは顔立ちだけでなく、全体の作風や乾漆を仕上げに用いた造像技法も共通しており、同じ工房で同じ時期に造られたものと考えられます。像のできばえや発願者の高い身分から、それは当時第一



観心寺 如意輪観音像

級の工房であったと見てよいでしょう。

作風や造像技法の上からやはり同じ工房の作と考えられるものに京都安祥寺の五智如来像があります。貞観元年(859)ころの作と思われる、その顔立ちは観心寺像などと非常に近いのですが、ただ頬か



法華寺 十一面観音像

ら顎へかけての引きしまった肉どりがなくなり、頬の張ったむしろ下ぶくれの顔になっています。これと同じ時期の、別系統の像でも同じ下ぶくれの傾向が出ています。こうして見ると承和後半期の840年代と9世紀の半ば過ぎでは、仏像

の顔立ちに一般的な変化があったようです。おそらく、それぞれの年代での理想のタイプの顔立ちの変化を反映しているのでしょう。

奈良法華寺の本尊十一面観音像は、緊張感の張る美しい姿、力強く鮮やかな彫り口で有名ですが、その造立年代を示す記録はありません。しかし、頬がよくしまった、切れ長の目を持つその顔立ちは、まさに観心寺像など承和後半期の像に通ずると思います。

ところで、先に観心寺像の発願者として名を出した嵯峨院太皇太后橘嘉智子は、嘉祥3年(850)に崩じますが、『文徳実録』にのせるその伝記には、先ず、その父が身長6丈2尺の偉丈夫で眉目は絵にかいたように秀麗であったことを述べ、太后については人となり寛和で、「風容絶異」、手を下せば膝を過ぎ、髪は長く地に達したといいます。手が膝を過ぎるといのは誇張でしょうが、のびやかな肢体の、どうやらエキゾチックな感じのするすごい美人だったようです。そして、この文からすぐに思い出されるのが豊かな髪と長い腕をもつ法華寺の十一面観音像です。しかも『文徳実録』には法華寺の苦行尼が若き日の後を見て、後に天子(仁明)と皇后(淳和皇后)の母となることを予言したという法華寺との因縁話を記しています。法華寺像や観心寺像に反映された理想のタイプの顔立ちは、当代の美人橘嘉智子その人のものであったように思えてなりません。